直言

小児外科手術数・斜視手術数・NICU 「ほかいち」＝北海道で一番が3つある

115年の歴史をもつ「お産と子ども」の病院

天使病院（北海道）院長 山本 浩史（やまもと ひろし）



2025年11月から、徳洲会グループの仲間にしていただきました天使病院です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

当院は1911年に開設され、今年で115年になります。時を同じくして仲間入りした日鋼記念病院も、同じ年の開設です。私は2002年に北海道大学第一外科から天使病院に派遣され、以来、この病院で働いています。カトリックの「聖母会」に始まり、「カレスアライアンス」への経営譲渡、医療法人「母恋」としての独立、母恋の社会医療法人の認可を経て、14年に新病院が完成しました。25年11月に徳洲会に入りましたので、約20年で3回の経営母体の変更を経験しましたが、そのたびに地域の皆さまと職員に支えられ、今日があります。

初期臨床研修の受験者数 今年は過去最高の29人に

1970年頃には、年間分娩数が3,000件を超えて日本一になったそうです。当時の札幌市の出生数の6分の1にあたります。現在は年間700件ほどですが、「地域周産期母子医療センター」として、北海道で最初に認可されたNICU（新生児集中治療室）15床、妊娠中のお母さんのためのMFICU（母体胎児集中治療室）6床、退院前の準備をするGCU（新生児回復期治療室）11床を備えています。産科医と小児科医が24時間常駐し、高齢での出産や、糖尿病や高血圧を合併した妊娠にも対応しています。無痛分娩のご希望も増えており、麻酔科医と協力して取り組んでいます。小児科は札幌市の二次救急当番も週1回担当し、NICUの24時間体制を守っています。

小児外科の患児の主治医は小児科医です。新生児や小児の全身管理に慣れた専門家が診ていることも、当院の特徴です。釧路や函館、帯広など全道各地からの搬送も受け入れています。

「ほかいち」とは「北海道で一番」を表す言葉で、この「ほかいち」が当院には三つあります。小児外科の手術件数、眼科の斜視手術件数、そして15床のNICUです。私が小児外科を開設した2002年、全身麻酔の手術は年間80件ほどでしたが、今では約330件になり、そのうち約20件は新生児の手術です。眼科は子どもの斜視手術に力を入れ、年間約120件行っています。どれも、お子さんとご家族の安心につながる仕事だと思っています。

04年度に始まった新医師臨床研修制度では、初年度は採用2人から手探りで取り組みました。現在は14人の初期研修医が学び、これまでの修了者は約100人になりました。他の病院で経験を積んで戻り、中心となって活躍している医師もたくさんいます。今年の受験者は過去最高の29人で、7人の枠に対し中間公表は11人でした。うれしい悲鳴です。他の職種の見学・実習も含めると、年間約800人が各部署を訪れます。若い力は、病院全体を元気にしてくれます。

徳洲会入りし救急応需が急伸 当院は確実に良い方向へ進行

徳洲会に入って一番変わったことは、救急です。25年4月に救急専門医が常勤となり、体制づくりを進めていましたが、徳洲会入りで一気に加速しました。救急救命士を採用し、今年8月に救急車を購入して、9月から稼働しています。昨年、1,750件だった救急車の受け入れ台数は、過去1年で2,000件を超えました。これから冬を迎え、さらに増えると思います。

当院は「お産と子ども」の印象が強く、成人医療は目立ちません。がんの化学療法や肝臓・膵臓・肺の手術など、当たり前に行っていますが、札幌の中心部には、がん、脳血管疾患、循環器疾患に強い病院が数多くあります。当院には脳神経外科も循環器外科もありません。整形外科、麻酔科、内科、外科、NICU、産科の医師、そして看護師も足りていません。雪が降ると、高齢の方の転倒が増え、救急要請が急増します。受け入れきれずに悔しい思いをすることもあります。経験できる症例は豊富ですので、全国の先生方、ぜひ当院にいらしてください。

最後に、徳洲会の仲間になって約1年、病院は確実に良い方向に進んでいます。職員の頑張りと、徳洲会のサポートのおかげです。“生命だけは平等だ”の理念の下、「母恋」から受け継いだ“皆さまに「ほっ」としていただける病院を目指し、「一歩前へ」”、そして“職員は財産”という言葉を大切に実践してまいります。

皆で頑張りましょう。

徳洲会栄養部会

「栄養情報提供」を促進

臨床WG拡大研修会開く

徳洲会グループ栄養部会の臨床ワーキンググループ（WG）は、オンラインで拡大研修会を開催した。128人の管理栄養士が出席し、栄養情報提供の取り組みについて情報共有や意見交換を行った。

栄養情報提供は、入院中の栄養状態や食形態、摂取状況といった情報を文書で転院先の病院や退院先の介護施設などに送付すること。切れ目のない栄養管理や摂食・嚥下（えんげ）サポートを行うものとして、国も診療報酬上で評価している。



オンラインで全国の管理栄養士が情報を共有。介護施設在籍者も

会の前半では、栄養情報提供の好例として3病院が自院の取り組みを報告。山川病院（鹿児島県）は地域で共通の栄養情報提供書を作成したり、事務作業を効率化したりして情報提供書の作成が増えた状況を説明した。札幌真駒内病院は、各種情報の入手方法や情報提供書作成時間の目安などを提示。「手間と時間はかかるものの、得るものは大きいです」と、意義の大きさを強調した。

最後は武蔵野徳洲会病院（東京都）が、栄養情報提供をテーマとする演題を発表した第29回日本病態栄養学会年次学術集会（1月30日～2月1日、京都）について報告。提供書のフォーマット見直しなど作成方法の簡略化を図ったり、他職種や近隣施設と連携しやすくしたりするなど工夫を示し、再構築したことで栄養情報書の作成件数が倍増したことを紹介した。

後半はグループディスカッションを実施。栄養情報提供書の作成で困っていることや、情報共有を円滑にするためのアイデアなどを話し合った。会のなかでは、あらためて部会としても積極的に取り組む方針であることを伝えるとともに、作成しやすいシステムに改善していることを共有した。

臨床WGリーダーを務める宇治徳洲会病院（京都府）の赤尾志・栄養管理室長は「正しい栄養情報を提供することは、とても重要。栄養部会嚥下調整食一覧表の作成や記載内容の標準化など負担軽減も図っているので、少しでも多くの施設に取り組んでほしいと思います」と期待を寄せた。

「睡眠×腸活」テーマに

札幌もいわ病院が市民講座



地域の方々を中心に68人が集まり盛会

札幌もいわ徳洲会病院は9月3日、院内で「札幌睡眠ラボVol.2」を開いた。睡眠の正しい知識を地域に伝える企画で、後平泰信院長（日本睡眠学会総合専門医）が発案者。毎回、睡眠と睡眠にかかわりの深い分野をかけ合わせた「睡眠×○○」をテーマに掲げ、企業や研究者とも連携し、講演などを通じて睡眠を多角的に伝えている。

今回は札幌ヤクルト販売と「睡眠×腸活」をテーマに実施。68人が参加した。まず同社の辻綾乃栄養士が「腸から健康を考える」と題し講演、腸内環境と、睡眠を含む健康とのかかわりを解説した。続いて後平院長が「働く人のための睡眠講座」と題し、睡眠不足が病気のリスクを高め、生産性低下による経済的損失を招くことなどを指摘した。質疑応答の時間も設け、睡眠と腸内環境の相乗効果や受診の目安などについて答えた。

後平院長は「寝ても疲れが取れないといった悩みを抱えていながらも、受診に至らない方が多くいます。気軽に相談していただけたら」と呼びかけた。Vol.3は11月21日に同院内で「睡眠×回復」をテーマに予定。

病気のはなし 238

若いうちから骨密度貯金を

大腿骨近位部骨折

大腿骨（だいたいこつ）近位部（足の付け根部分の大腿骨）骨折は、ADL（日常生活動作）を大きく損ない、高齢者が寝たきりになる原因のひとつだ。骨が健康な状態であれば交通事故など強いダメージを負わない限り、この部分を骨折することはまずないが、骨がもろい状態であれば些細（ささい）な衝撃でも折れてしまう。「まず骨折しないことが重要です。骨は年齢とともに弱くなります。とくに女性は閉経で骨を守る女性ホルモン（エストロゲン）が減り、骨がもろくなる骨粗鬆症（こつそしょうしょう）が急速に進みやすくなるため、注意が必要です」と天使病院（北海道）の小林正明・整形外科科長は警告する。

大腿骨近位部骨折は、寝たきりの期間をできるだけ短くするためにも、全身状態が良好であれば手術が第一選択。全身状態さえ良ければ高齢でも手術しADLを上げる意義は大きく、「当院では100歳前後の方に手術することもあります」と小林科長。

骨のもろさが原因の脆弱性骨折は、まず手首の骨折に現れ、次いで背骨（圧迫骨折）、上腕骨近位部、その後、大腿骨近位部に至ることが多いため、小林科長は「できるだけ手首の骨折などの段階で骨粗鬆症に気付き、治療することが大切です」と二次骨折予防を訴える。骨密度を若いうちに上げておくと、加齢による骨密度低下を抑制できることから、「若いうちから適度な運動とバランスの良い食事により、骨密度貯金をすることをおすすめします」と呼びかけている。

